

界」と考える人がいる。なお、現世と来世で秩序の善意と悪意が異なるとする思想もあり、たとえば現世は邪悪な秩序が支配し、来世を善良な秩序が支配している、と考えたり(グノーシスの一部など)、現世は楽しく、来世は暗い世界である、と考えたりする(古代ユダヤなど)。

「善い社会」の思考実験が教える教訓は、全体社会の最低限の秩序(合法性)を裏付ける最終的な審級が求められ、それは「人類」「新」「普遍」「宇宙」等々の形容詞を持ちながら、「宗教」と呼ばざるを得ないようなものとなる、ということである。

インターネットにみる流行神

——中国の「受験の神」をめぐる——

黄 緑萍

中国では、インターネットの普及により、そのユーザー数は現在五・三八億にも上るといふ。インターネットは、あらゆる分野に大きな影響を及ぼしており、もちろん宗教もその例外ではない。二〇〇九年、女性歌手の李宇春をモデルに作られた「春哥」という「受験の神」がインターネットに現れた。二〇〇五年八月、二十一歳の李宇春は、湖南テレビの歌謡コンテスト「超級女声(スーパーガール)」で優勝した。彼女はその後、ポップス歌手として活発な活動を続けているが、二〇〇八年になると、彼女に因んで、「春哥」(日本語の意味は「春兄」)及び「春哥を信じれば試験に落ちない」などの文句がネット上で流行り出した。さらに翌年にはウェブサイト「豆瓣網」が登場し、その中の「春哥廟」と称する祈願サイトには、現時点まで

七千件以上の祈願が掲載され、その大半が受験に関する祈願であった。「春哥」の出現を皮切りに、以後「範進」、「考神」など「受験の神」と呼ばれる神々がインターネット上に次々と現れ、人々の祈願対象とされると同時に、メディアからも注目を集めていった。

これらの「受験の神」に関しては、新たな社会現象として中国の学者が関心を寄せている。しかしその流行の過程とメカニズムに言及する研究は、管見の及ぶ限りまだ現れていない。本研究は、この一連の「受験の神」をインターネット時代の流行神として取り上げ、宮田登により提唱された流行神の定義に則り(宮田登「流行神」大塚民俗学会編『日本民俗事典』一九七二、五八四)、先行研究(宮田登『近世の流行神』一九七二、鈴木弓『流行神』の形成とその展開に関する実証的研究——中国地方の事例を中心に——一九九二)によって指摘された、従来日本に見られてきた流行神現象と比較しながら、中国における「受験の神」の展開過程や特徴を明らかにし、インターネット時代における流行神の特徴と信仰の傾向を考察したものである。

具体的には「受験の神」とされる神々の展開過程をまとめ、「春哥」に対する祈願の件数、行為、内容をめぐって考察を行った。これをこれまで宮田と鈴木により報告された従来の流行神と比較した結果、中国の「受験の神」の特徴は以下の三点にまとめることができた。(①急速なはやりと数多くの祈願者)どの祈願サイトも開設された後すぐに非常に多くの人々により、数多くの祈願が書き込まれ、急速に流行り出した。その

後、急速に人気が衰えて廃れてしまった祈願サイトもあれば、現在まで多くの祈願者を抱えるサイトもある。(②祈願対象は抽象的なもの)祈願対象は画像で現れた場合もあるが、多くはインターネットというバーチャルな世界に限定され、具体的なモノの形で現れていない。(③宗教者が関与しない祈願者の自発的行為)これらの祈願サイトには宗教者が一切関与せず、いずれも祈願者の自発的な祈願行為として成立している。

また、これらの「受験の神」の出現は中国の宗教復興を背景に、人々の宗教的需要の増加を基盤としている。八十年代以降に生まれた新たな宗教的ニーズの一つとして、「難しい大学受験に合格するための祈願」が黄強により指摘されている(黄強『市場経済化する宗教——中国上海市における道教の変遷と復興』二〇一〇、四四)。もちろん、大学受験だけではなく、「難しい各種受験に合格するための祈願」も大きな宗教的ニーズとなっている。その一番の受益者である大学受験生と大学生をはじめとする若い年齢層は、とりわけ、熟知しているインターネットと自身の宗教的ニーズを結びつける主力になっている。今後は、中国の宗教復興の事情を加味しながら、インターネットにおける宗教の新たな動向に注目し、日本の事例との比較検討を行っていきたい。

政治権力と宗教権威

米井 輝圭

ひとつの宗教が政治にほとんど包摂されているようにみえているような場合にあっても、そこに独自の権威を保とうとする

力が働くかぎり、一個の「宗教」として存立し、宗教的権威を発揮することは可能である。本発表では、一例として十二世紀の陰陽道をとりあげて、政治の場における意志決定のプロセスへの関与という機会を通して、当事者が宗教としての権威を維持し、かつ主張していこうとしたことを検証する。

当時の神祇信仰や仏教が王権と相依的な関係にあったのに対して、陰陽道は朝廷の一部局である陰陽寮官人の仕事とされており、一個の宗教としての自立性は弱いようにしばしば思われている。しかし、独自の神や祭儀を成立させ、信者と執行者との信念と儀礼の場において結ばれているという意味において、それは宗教としての要件をすでに備えるに至っていた。そもそも令制において陰陽寮とその職掌が官制の枠内のみにとどめられたのは、宗教たるべき可能性を欠いていたからではなく、むしろ、国家の安泰をも脅かしかねない危険な宗教運動に発展する要因をはらんでいたゆえにとられた処置でもあった。

当該時期の陰陽道は、官人としての陰陽師が担った。貴族社会の上層部に位置してはいなかったとはいえ、政治的な意志決定においては、その知見が左右することになっていた。朝儀の日時勘申の場合、最終的には議政官たる公卿が判断を下すが、原則として陰陽寮の提出した候補からのみ決めるのが原則であり、上卿といえども勘文を無視することは出来なかったのである。そうした場面は日常的な小事に限られていたが、しかし政治的な混乱期には、陰陽師が重大な決定を左右するような局面も突発的に発生する。そこでの振る舞い方次第で、権威を高めるか逆に失墜させるかが問われるようなことも起ったのである。